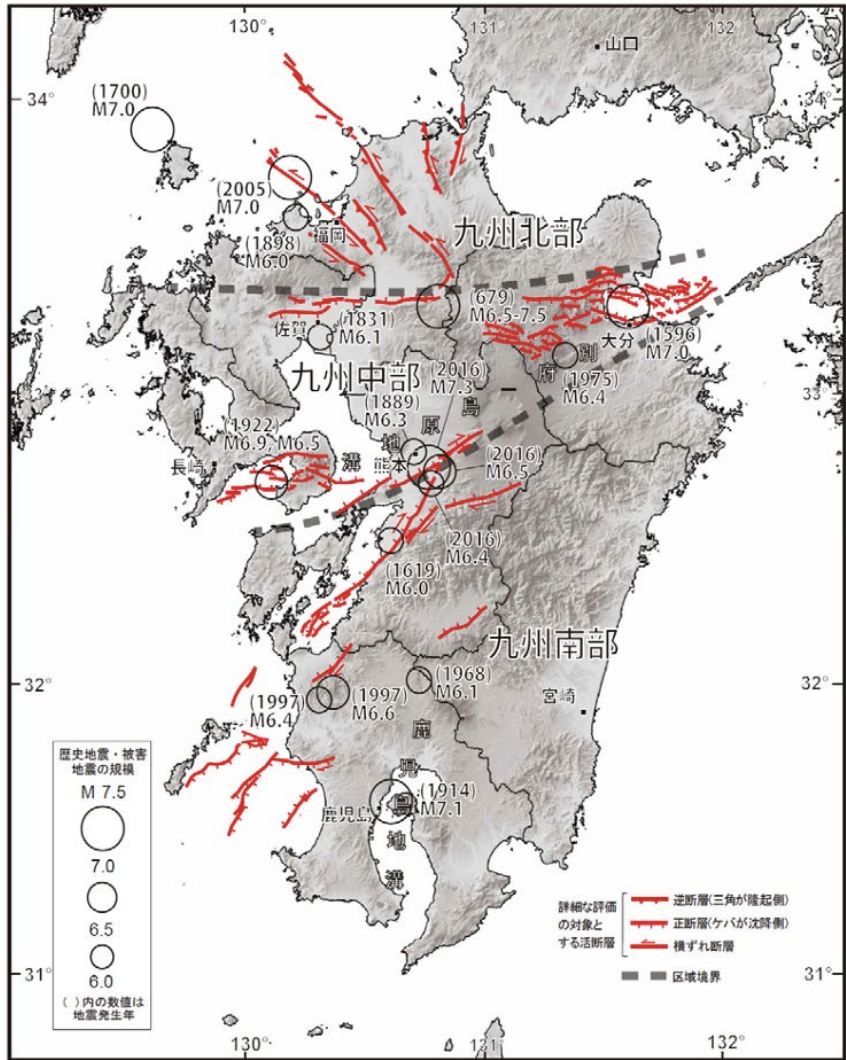


九州地域の活断層の長期評価



地域区分	地域の長期評価 (M6.8以上、30年確率) (%) (注17、注18、注19)	
	区域別の確率値	九州全域の確率値
	95%信頼区間(中央値) (注20)	
九州北部	7～13 (9)	30～42 (35)
九州中部	17～27 (注21) (21)	
九州南部	7～18 (8)	

注17： 個別の活断層の長期評価では、地表に断層活動の痕跡が確認できる「固有地震」(※)の発生確率のみを評価している。一方、マグニチュードが6.8以上の地震でも明瞭な地表地震断層が出現しない場合や、出現しても長さやずれの量が活断層の長さなどから推定されるものに比べて有意に小さい場合があることを鑑み、本地域評価では、評価対象とした活断層において地表の証拠からは断層活動の痕跡を認めにくい地震の発生する確率も評価している(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会、2010) (詳細は、本文 (https://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) 注17 参照)。

※「固有地震」とは、同時に活動すると想定される「活断層帯」や「評価単位区間(詳細は、本文 (https://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) の「付録2-1 1回の地震に対応して活動する断層の長さの評価の考え方」参照)」の全体が活動する固有規模の地震のことである。Schwartz and Coppersmith (1984, 1986)が提唱したCharacteristic earthquake modelについて、垣見(1989)が「個々の断層またはそのセグメントからは、基本的にほぼ同じ(最大もしくはそれに近い)規模の地震が繰り返し発生すること」と解釈しているものである。

地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)：「活断層の長期評価手法(暫定版)」, 117p.
垣見俊弘(1989)：固有地震説雑考：活断層研究, 7, 1-4.
Schwartz, D. P. and Coppersmith, K. J. (1984): Fault behavior and characteristic earthquakes from the Wasatch and San Andreas faults, Jour. Geophys. Res., 89, 5, 681-5, 698.
Schwartz, D. P. and Coppersmith, K. J. (1986): Seismic Hazards -- New Trends in Analysis Using Geologic Data. In Active Tectonics, National Academy Press, Washington, DC, pp. 215-230.

注18：「詳細な評価の対象とする活断層」とは、地下を含めた断層の長さが15 km 程度以上で、断層の位置・形状や活動履歴など活断層の特性を詳細に評価したものである。「簡便な評価の対象とする活断層」は、地下を含めた断層の長さが10 km 程度以上、15 km 程度未満で、断層の分布のみを評価したものである。各区域及び九州全域における今後30 年間に発生するM6.8 以上の地震発生確率には、「詳細な評価の対象とする活断層」に基づく確率だけでなく、「簡便な評価の対象とする活断層」に基づく確率も含まれている(詳細は本文 (https://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) (説明)「3. 九州地域の活断層で発生する地震の長期評価」を参照)。

注19：九州地域の活断層の長期評価(第一版)(地震調査研究推進本部地震調査委員会、2013)時点での活断層区分に基づき算出。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013)：「九州地域の活断層の活断層の長期評価(第一版)」, 81p.

注20： 確率値は、本文 (https://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) 「付録4-3 評価地域の地震の発生確率の幅の統計的扱い」に基づく。

注21： (注13)を反映して算出。

九州地域において詳細な評価の対象とする活断層のずれの向きと種類及び九州地域で発生した歴史地震・被害地震の震央

地震調査委員会「九州地域の活断層の長期評価(第一版)」より